

[墨絵の美展によせて]

館藏品紹介 白描大威徳明王図像について

大威徳明王は、梵名を閻曼徳迦と言い、六足尊とも呼ばれます。五壇法では、五大尊の一つとして西方に配され（中央不動、東降三世、南軍荼利、北金剛夜叉）、単独でも大威徳法の本尊として、息災、調伏等の修法に請用されます。基本的な像容は『大日経疏』巻六に六面六臂六足とあり、各面に三目があること、「極忿怒の状」をなし、水牛を座とすること等が説かれます。第一手に注目すると、壇拏印（第三指を立てて両手を組む）を結ぶものと、円珍請来様の「五菩薩五忿怒図像」のように弓矢を執るものの二種に大別されます。前者は、弘法大師御筆様と呼ばれる「仁王経五方諸尊図」（東寺他）や「高雄曼荼羅」（神護寺）に依拠します。これらは水牛を座としませんが、『覚禅抄』には水牛座に乗る「大師御筆様」の例があります。

大和文華館に所蔵される「大威徳明王図像」は、この空海請来の図像に基づくものとみられます。但し、文華館本は左第二手で索を執る点が異なります。五大尊像では空海の構想に基づき承和六年（839）に開眼された東寺講堂像、大治二年（1127）の東寺「五大尊像」中の大威徳明王像がいずれも文華館本と同一図像であり、他に11世紀末頃

のボストン美術館本、12世紀後半の談山神社本や醍醐寺本が知られます。ボストン本以下の絵像においては、いずれも大威徳明王が正面を向かず、体を左へ振った姿に描かれます。水牛も頭部のみを右方へ向けます。明王の腕は体幹部を中心軸とした線対称になるように配されます。さらに第三手の掌の向きを左右変えることで対称性を幾分崩します。この対称性を導ぶ点は正面観の「高雄曼荼羅」と共通し、前者が後者からの派生型であることを思わせます。一方、円仁請来系とみられる『叡山本兩界曼荼羅図像』（醍醐寺）に同一図像のあることも注意されます。

文華館本は、空海所縁の図像に連なり、その淵源は空海や円仁が渡った中唐期の大陸にあるとみられます。但し、経軌等に「上歯咬下」とされる頂上中央面が開口し、また頭光を描かない点は文華館本の特徴とみなせます。さらに同一図像による彩色像と比較すると、表現上の要請によるとみられる形態の変化を指摘できます。

文華館本は、縦30センチ、横50センチほどの紙を六段三列に継いだ油紙に描かれています。その縦寸はボストン本（192.5センチ）に次ぐものです。透写に適した油

紙は白描図像に多く用いられます。また図中に細かく彩色の指示（色注）が記されています。これらのことから文華館本はボストン本に匹敵する大幅の絵像を透写したとみられ、さらに別の彩色像の粉本とされた可能性もあります。以下、原本の絵画史上の位置を形態や賦彩の特徴から考えてみましょう。

形態の特徴を同一図像の東寺本と比較しつつ考えましょう。まず、東寺本に較べ、像が画面に占める割合の大きいことがあります。それは東寺本に先行するボストン本に近似します。次に東寺本に較べ、体に対して頭部が大きくなり、さらにそれが前傾し、右肩部に空間が生じます。六本の腕が全体に細くなり、特に前膊部が短くなります。これにより右第三手の上膊部が特に長く見えます。これは、東寺本やボストン本、特に後者に見られる傾向です。持物も小さく華奢になります。これらから東寺本の下方向への安定感に変わり、文華館本には前方への動勢が生じます。

ボストン本と東寺本の形態を比較すると、頭部が体幹部に対してほぼ垂直となる前者に較べ、後者は中央面が幾分前傾します。手足や持物が小さくなる傾向も見られます。東寺本と文華館本の形態の差異は、ボストン本から東寺本への変化に沿うものとみなせます。

次に色注から特徴的な賦彩を指摘すると、頭髮には「紫色」とあります。ベンガラを指示したものとみられ、天曆五年（951）の醍醐寺五重塔初層天井にはベンガラ

を「紫土」として用いた例があります。東寺本の頭髮にもベンガラが用いられます。宝冠は金銀箔の天冠台に彩色を施した宝相華状の飾りを付していたようです。東寺本では降三世明王像の宝冠に金銀の箔が併用され、大威徳明王像の宝冠には、彩色の宝相華形の飾りが施されます。文華館本の宝冠はこの二種を組み合わせた形になる点注目されます。また、胸飾の形態は12世紀の仏画に通例のもですが、金箔上に群青を暈す技法が採られていたようであり、これは12世紀中頃の東京国立博物館「普賢菩薩像」の白象の飾り金具等にもみられます。また臂釧の飾緒の鈴は12世紀前半の松尾寺「普賢延命像」等に例があります。頭光を描かないことは、内二幅が11世紀末に遡る「五大尊像」（東振寺）の大威徳明王像にみられますが、12世紀前半の甚目寺「不動明王像」のように頭光を透明な輪としてあらわす例もあり、そうした表現を写し漏らした可能性もあります。

文華館本の原本はその様式上の特徴から12世紀前半頃の作とみられます。白河院政期には大威徳法の盛行に伴う大幅像の制作が知られます。その威容はそういった時代に相応しいものとも思われます。但し方形に整えられた火焰光背は、東寺本のように他尊との調和をなかったものともみられ、当初単独像であったかは明らかにし得ません。また文華館本がいつの時点で転写されたかについては未だ考究の余地があります。（増記隆介）

大和文華館本



御室版高雄曼荼羅図像



ボストン美術館本



東寺本(五大尊像の内)



季刊 美のたより No.139

平成14年 7月 5日

発行 大和文華館